

瀋陽・広州留学体験記

◎角野貴啓（経済学部07年卒）

留学歴

- 中国瀋陽、瀋陽師範大学
(2005年3月～7月)
- 中国広州、華南師範大学
(2005年9月～2006年1月)

留学の種類

私費留学

留学の動機

海外で生活したかったのがまざ始め。あとは、第二外国语で経験あり、言語の将来性、中国への興味等いろいろ。



（中国のドナルドと角野さん）

お金
¥¥¥

費用 >> 学費20万円、宿舎費18万円、旅行20万円、海外旅行保険10万円、生活費20万円(10ヶ月概算)

ある1週間のできごと

	月	火	水	木	金	土	日
午前	中国語	中国語	中国語	中国語	中国語	洗濯、テレビを見るなど	テレビを見るなど
午後	友達と遊んだり、しゃべつたり	買い物、ネットカフェなど	別の学校で日本語授業	街へ出かけるなど	友達と遊んだり、しゃべつたり	ネットカフェへ行くなど	市内探検、買い物など
放課後	友達と夕食、次の日の予習	広東語の学習、次の日の予習	友達と夕食、次の日の予習	広東語の学習、次の日の予習	日本語学科の学生と相互学習	友達と飲んだり遊んだり	友達と飲んだり遊んだり、次の日の予習

(備考) 広東語の学習は、友達のつてを頼って広東省出身の中国人学生を先生として雇った。土日は、広東省内、香港や福建省など周辺に小旅行に行ったりすることもしばしばあった。

・留学準備期

2004年11月ごろ なんとなく中国留学を心の中で決め始める
 12月ごろ 先生や先輩や親に相談
 2005年1月ごろ 資料請求を出しまくる。どこに行くか悩む。
 2月ごろ 意を決して国際電話をかけ、留学許可をもらう。月末に中国へ

・簡単な足跡

3月：瀋陽での学期開始。日本語学科の中国人学生と相互学習開始。
 4月：各地で反日デモ続出。二胡を習い始める。
 5月：内蒙古自治区、ロシア国境付近へ小旅行。留学生カラオケ大会に参加。
 6月：長春にいる先輩が訪ねてきたり、逆に訪ねたり。
 7月：瀋陽での学期終了。その後、瀋陽→広州→瀋陽→蘭州と飛び、旅行へ突入。
 8月：ほぼ8月いっぱいチベット滞在。半分はラサ周辺、半分は西チベット。
 9月：広州での学期開始。日本語教師のバイトも始まる。
 10月：ラオスへ小旅行。広東語の家庭教師を雇う。
 11月：月末に客家円楼を見に小旅行へ行く。
 12月：日本語授業をしていた生徒達ともお別れ。留学生活最後の語学試験。
 1月：香港へ小旅行。中旬に帰国。

・留学の動機、経緯

大学に入ったときから、漠然と学生のうちに海外で生活してみたいななんて考えていた。留学経験者の多いゼミに入っているいろいろ情報を得ることができたが、部活をやっていたし、一年くらいの長期間で行きたかったので、3年生が終わって部活を引退してから行くことにした。

留学行く前も、留学先でも、帰ってきてからもなんで中国なのかよくと聞かれたが、実は特に深い意味はない。昔から漠然と興味を抱いていたとか、変化が著しい時期で面白そうとか、留学費用が安いとか、中国語は将来性があるとか、いろんな要素が絡み合った結果の決定です。

・大学、授業

中国では、9月に新しい年度（中国でもこう言うのか知らないけど）が始まる。で、1月くらいに休みになり3月に新学期が始まり、7月に休みになり、9月にまた新年度を迎えるという感じになっている。僕は3月から始まる春学期を遼寧省瀋陽市の瀋陽師範大学で、9月からの秋学期を広東省広州市の華南師範大学で過ごした。

基本的に、語学留学というかたちで中国に留学する場合、授業は午前中で終わりである。たぶん留学生をとってる中国の大学はほとんど同じだと思う。それに加えて大学によっては、午後に太極拳、習字などの選択クラスがある。僕は華南師範大学で広東語クラスをとっていた。広東語クラスにはけっこう期待していたのだが、週一回の上に期間も2ヶ月ほどで、しかも先生も適当でひどかったので時間の無駄だと思い、出席しなくなった。先生の広東語がほんものっぽくなかったし、質問してごまかされたりした人もいて、ほんとは広東人じゃないんじゃないかという噂までたった。でもあるだけマシで、瀋陽師範大学ではそもそも選択クラスなんてなかったし、ホームページには紹介されているのに実際は無いなんてこともよくある。

・留学開始当初の自分の中国語レベル

中国語は二年生の途中まで第二外国語で履修していて成績もそこそこ良かったものの、プランもあって最初のころはほんとに大変だった。「しかし」って何だっかとか思って辞書を引いていたくらい絶望的だった。しかし留学に来たからには言葉をマスターせねばならんと意気込んでいた自分は、レベルにして真ん中くらいのクラスに入った。っていうか無理言って入らせてもらった。そんなもんで、休み時間にクラスメート達が楽しく先生とおしゃべりがしている輪にも入れず、けっこうつらかった。簡単な意思疎通にも労力を要し、先生が課す宿題の内容も聞き取れなかつた。聞き取りの時間は当たられても1、2ヶ月ほどは「わからない」と言い続け、そんなときに先生がかけてくれるフォローの言葉も、だんだん定式化し、それが循環していくようになつた。ほんとに中国語が話せるようになるのかともすごく不安だった当時の自分をまだ覚えている。しかし、二ヵ月半くらい経つた頃から急にレベルの上昇を感じ、それからはおおむね順調にレベルアップしていった。

・韓国人村

瀋陽師範大学では、留学生の8、9割が韓国人であった（たぶん東北地域の留学生事情はどこもそうであろう）。留学生宿舎では常に韓国語が聞こえ、まるで韓国人村である。中国語に加えて韓国語もマスターしたいという人がいたら中国東北地方に来ると良いってぐらいである。留学生寮には韓国料理の食堂や、韓国商品も扱う売店も併設されている。街には韓国人街があり、そこから通学バスで通ってくる人も少なからずいた。

余談だが、僕は瀋陽師範大学に来て韓国人の豪遊っぷりに少々びっくりしていた。週末になると必ずといっていいほど街の韓国人街に遊びに出かけていき、僕より年下の子でも買い物の行き帰りにタクシーを使うのだった。事実は確かめそこなつてしまつたが、ありえないくらい良いレートで換金してくれるルートがあつたらしい。

・同屋（トンウー）

これは中国語で相部屋の人の意味である。瀋陽にいたときは留学生寮が二人部屋しかなかつたので、相部屋だった（二人分の寮費を払つて一人で住む人もいた）。留学生の8、9割が韓国人なので、やっぱり相部屋は韓国人だった。実は僕は相部屋がわずか一学期の間に二回変わつていて。

一人目は、18歳（確か）の高校を出たばかりの韓国人だった。彼は、僕が寮に入った日の夜帰つて來なかつたので、朝起きて初対面だった。「私は新しく來た日本人留学生です。よろしく。」と拙い中国語で話しかけても、ぽかんとしている。わからないようなので英語で話しかけても、何か噛み合わない。どうやら彼は英語も中国語もだめなようだ。彼はカップラーメンやお菓子をくれたり、ごはんや卓球に誘つてくれたりするのだが、その都度「あー」とか「うー」とか言いながらジェスチャーで意思を伝え合つていた。しかしある日のこと、部屋に戻ると彼の荷物がなかつた。こんな生活が大変だつたんだろう、彼は部屋を出て行つたのだった。しかも当時の自分の日記を見ると、相部屋生活が始まってわずか1週間の出来事である。若干ショックだったが、一人分の料金で二人部屋を使えることになつてラッキーだった。

しかし、二人目はすぐやってきた。今度はもっと若い16歳（確か）、やっぱり韓国人だった。彼は中国語がよくできたので、意思疎通には困らず、そこそこ上手くやつていたのだが、そのうち部屋に帰つことが少なくなつた。どうやらここでできた彼女の部屋に泊まるようになつたらしい。僕はまたまた二人部屋を一人料金で占拠できるようになった。後で聞けば、彼は授業にも出なくなつてゐたせいか、もともと市内に住んでいた両親と一緒に住むことになつたのだとう。

↓瀋陽市販大学のキャンパス



瀋陽にいたときは、大学の音楽学科の学生に一時間30元（日本円で450円ほど）で二胡（中国の伝統楽器。女子十二樂坊で非常に有名になつた）を習つていた。けつこうな音量が出るので、練習するにも留学生寮の中ではうるさいだらうと思い、夜のキャンパスを人気のない場所を求めてさまよつたことがあつた。しかし、人のいなさうなところに限つてよく人がいる。カップルがいちやいちやしているのだ。

中国人学生は、基本的に皆家を離れて大学の寮で暮らす。その寮は、一部屋4から8人もいる多人数部屋で、もちろんプライバシーはない（逆に一人部屋はさみしいから嫌らしいのだが）。中国では、よく学生食堂でカップルがキスしていたり、その辺でも抱き合つてしばらく離れなかつたりと日本に比べて破廉恥な行為が目立つが、やはり二人きりで過ごしたいとなると夜のそうした人気のない場所になるのだった。たまに茂みががさがさ動いたりしていて、気になって見に行こうとしたがやっぱりやめた。練習場所が見つからないので、仕方なく弦の間にティッシュをはさんだりして情けない音をたてながら練習するしかなくなつた。

・安いものにはわけがある

中国には、安くてしかも品質のよいものはないと思う。というより、安いものには安い理由があるのだと思った。中国に行つたばかりのころ、学校内のスーパーで安いチョコレートを買つたら、まちがつて茶色のろうそくを買ったのかと思うほどまずかつた。とても食える代物ではなかつた。また、安い陶器のコップを買って、コーヒーを飲もうとお湯を注いだら、コップが割れて机の上が悲惨なことになつた。それじやあということで、プラスチックの容器にお湯を注ぐと、明らかに体に悪そうな危険なおいがした。電子辞書に使つた電池が数時間でだめになつた。朝食のために買つていたパンは、安いものを選ぶとほぼ例外なくまずかつた。日本はいい国だ。100円だせばそこそこの品質のものが買える。

ただ、食堂などで食べられるものは安くて美味しい。チャーハンも4,50円で食べれたし、數人で一緒に行って一人150円も出せばごはんと数種類のおかずとスープが頼める。しかし安くて美味しいのはいいのだが、衛生状態は良くない。ある食堂では、使つた食器を水に浸けておく、スポンジで洗う、それを洗い流すという一連の作業が一つの大たらいの中で完結していた。こういうことを見て見ぬふりをすることも大事になつてくる。やはり中国はどこまでいっても安からう悪からうなんだろうか。

・交通事情

中国では、大きな交差点でないかぎり信号をあまり意識しなかつた。大きな交差点では、北京オリンピックのためのマナー向上のためか交通安全員がいることもあるが、たいていの道路を渡るときは、車の流れに合わせて一車線ずつ立ち止まりながら渡っていく感じだつた。慣れるのにたいして時間はかかるなかつたが、でかいバスが目の前30センチくらいのところをごーっと通

・夜のキャンパス

瀋陽にいたときは、大学の音楽学科の学生に一時間30元（日本円で450円ほど）で二胡（中国の伝統楽器。女子十二樂坊で非常に有名になつた）を習つていた。けつこうな音量が出るので、練習するにも留学生寮の中ではうるさいだらうと思い、夜のキャンパスを人気のない場所を求めてさまよつたことがあつた。しかし、人のいなさうなところに限つてよく人がいる。カップルがいちやいちやしているのだ。

中国人学生は、基本的に皆家を離れて大学の寮で暮らす。その寮は、一部屋4から8人もいる多人数部屋で、もちろんプライバシーはない（逆に一人部屋はさみしいから嫌らしいのだが）。中国では、よく学生食堂でカップルがキスしていたり、その辺でも抱き合つてしばらく離れなかつたりと日本に比べて破廉恥な行為が目立つが、やはり二人きりで過ごしたいとなると夜のそうした人気のない場所になるのだった。たまに茂みががさがさ動いたりしていて、気になって見に行こうとしたがやっぱりやめた。練習場所が見つからないので、仕方なく弦の間にティッシュをはさんだりして情けない音をたてながら練習するしかなくなつた。

り過ぎていくときなんかは少し緊張した。

また道路がよく渋滞する。確かに道路自体が渋滞を起こしやすいようなところもあると思うが、明らかにお互いに譲り合えばお互いがスムーズに移動できるのに、と思われる場面に幾度となく遭遇した。ちょっと隙間があれば割り込み、またその後ろが詰まっていくという感じでどんどんごたごたしていく。外から傍観している限りはその非合理が信じられないくらいであるが、例えば列車の切符売り場なんかで並んでいる列が乱れ始めると、後から来たものに先は譲るまいとして体力を消耗する切符獲得戦争に参加することになり、いつのまにか自分もその非合理に身を落としている。「もっと他人に興味を持ちましょう」なんてスローガンを掲げるテレビCMが存在するのもうなずける。これで意識向上がはかられればけっこうなことだが、そうした混沌が見られなくなるのはそれはそれでさみしい。

・乞食

日本と違つて、街に出るとよくいる。一日中座っている人もいれば、歩きながらねだっている人もいる。二胡を弾いている目が見えない人もいれば、地面にお経のようなものを書いている人もいる。しかし中でも稼ぎがよさそうなのは、病気のせいか体が極端に痩せ細り、関節の曲がり方がおかしくなってる人たちである。そうした人々は、人がたくさんいる繁華街で、汚い服を着て、地べたを這いながら、人によっては台車に乗って移動しながら、道行く人からお金を集めていた。初めて見たときは、正直まともに見てられないかった。あまりにもむごかつた。

また、乞食に関してちょっとトラウマになりかけた経験がある。韓国人街で数人で食事をして外に出ると、汚い身なりの小さい男の子が僕の後についてきた。そのうち男の子は僕の服をつかみ、しまいには僕の足に抱きついてはなれなくなってしまった。困っていると、一緒に来ていた人たちが引き剥がしてくれた。後から聞いた話だが、そこで仕方ないからといってお金をあげてしまうと、あたりから同じような子どもがたくさん出てきて大変なことになるのだそうだ。しかも、それは大人が子どもたちにやらせているのだそうだ。それからしばらくは、バスの中などで小さい男の子がそばに来るだけでも背筋がぞつとしていた。

こんな乞食もいた。あれはラオスに入る手前の中国の小さな街だったと思う。一泊200円の安宿の部屋でくつろいでいると、外から大音量のカラオケが聞こえてきた。何事かと思って外を見てみると、台車にカラオケ機材を載せた乞食がそれを押して歩きながら、歌を歌ってお金をを集めているのだった。いい迷惑だろうに、彼が歩道の段差にぶつかると、その近くの店の主人が上げ下ろしを手伝うのだった。そんな資本を持ちながらなぜ乞食をしているのかと疑問に思わずにはいられなかつた。

・微妙な名前

留学中には名前についてもちょっと考えることがあった。僕の名前は、発音すると「カドノタカヒロ」となるのだが、中国では日本人と韓国人は名前の漢字を中国語読みされるので、僕は名字の部分をとって「ジャオイエ」と呼ばれていた。漢字はアルファベットなんかと違つてそれ自身が音を表す文字ではないので、中国に関わる日本人や韓国人は、自分の名前の漢字が自分の名前なのか、または実際に発音される音が自分の名前か微妙なところだ。一度中国人の友達に自分を「カドノ」と呼ばせてみようと思ったが、どうにも言いにくううなので、それまで通り「ジャオイエ」と呼んでもらうことになった。

しかし、欧米人に比べればこんなことはたいした問題ではないと思う。漢字の名前を持たない欧米人の留学生は、中国に来たときに中国名を授けられていたが、その名前の付け方がけっこう微妙である。広州でのクラスメートにリショーシャというロシア人がいたが、彼女は中国に来て「李秀莎（リーシウシャー）」と名づけられたようだ。ロシア語では名字もあるだろうに、これじ

やあ中国人の李さんじゃないか。だがこれはまだいい方だ。瀋陽では知り合いに「魏丹姐（ウェイダンジー）」というロシア人がいたが、ある日彼女のパスポートを見せてもらうと彼女の名前はアレクサン德拉だった。気になったので名前の由来を聞いてみると、まず彼女は昔インド人の友達からヴェダンダというインド名をもらい、中国に来てそのヴェダンダという名前を中国語にしてもらったのだそうだ。ここまで来るとほんと適當である。しかし、ロシア名をそのまま中国語にしてしまうとそれはそれで大変。例えばロシアつながりで、ドストエフスキイは、「陀思妥耶夫斯基（トウオーストウオイエフスキー）」となってしまうのだ。そういうことを思えば我々日本人は楽なものだった。

・反日デモ

僕が中国に着いて1ヶ月くらいした4月ころ、中国各地で反日デモが起きた。日本でニュースを見ていた人にとっては中国全土が怒り狂っているように見えたことだろう。僕がいた瀋陽でもデモがあつたし、広州でも人に聞くと学生食堂で反目的な中国人学生が集まって集会を開いたりしていたらしい。デモ前日には先生から電話があつて気をつけるよう言われたし、デモが行われている時間は、僕ら日本人留学生は大学はおろか留学生寮から出してもらえなかつた。中国人学生も、デモに参加しないようにと大学から出られなかつたようだ。

しかし実際のところ、恐怖を感じることはなかつた。自分のまわりが平和だったためだ。相互学習をしていた日本語学科の学生ともいつも通りだつたし、二胡を教えてくれる学生はそもそもデモがあるなんて知らなかつたし、先生や食堂のおばちゃんの態度が変わるものではない。

こうした日本人に友好的な、少なくとも敵意を持っていない中国の人たちのことは、なかなか日本には伝わりにくいのではないかと思う。伝わるのは悪いニュースばかりだ。一部の中国人の人たちが反日教育や反日報道で日本を悪く思うように、日本人々がニュースを鵜呑みにして中国を悪く思つてしまふのは悲しいことだ。これではたぶん永遠に構は埋まらない。

完全に余談だが、自分が中国にいる間いろいろな問題が起きまくつてゐる。中国に着いて1ヶ月で反日デモが起つた。いまだに患者が増えたとか死者が出たとか話題になる鳥インフルエンザも流行した。広州に移ると、広東省北部で工場からカドミウムが漏れ出した。カドミウムなんてほんとどんでもない。秋ごろには東北地方の黒龍江省で化学工場が爆発して、近くの都市が断水になつたり、ロシアの河川にまで影響を及ぼしていた。大学一年のときに初の海外旅行で中国に行つたときも、しっかりSARSが流行つてゐる。僕は中国にとつて疫病神なんだうか。

・北朝鮮国境の街へ

瀋陽から北朝鮮国境の街までバスで3時間ほどと近かつたので行つてみた。両国の間には国境を分かつ鴨緑江が流れつていて、中国側の河辺は公園としてよく整備されている。その辺では、戦争中に破壊されて半分だけになつてしまつた「断橋」（半分まで渡れる）や、北朝鮮側の河岸に接近する遊覧船などが楽しめる。

当然遊覧船にも乗つてみた。遠くかすかに観覧車のようなものが見える。そして河岸に近づくにつれて人々の様子もわかるようになる。船仕事をしている人、立つてゐる人座つてゐる人、こちつを見つめている人、何やら遊んでゐる人・・・。しまいにはこちらに手を振つてくれるほどのサービス振り。手を振つてお金もらうなんて商売があるんじやないかと思つてしまつた。しかしそんなのどかな光景からは、向こうの陸地が「あの」北朝鮮であるということがなかなか実感できなかつた。

・それでもバンクオブチャイナかよ

向こうでは中国銀行に口座を作つてお金を管理していた。中国元と外貨と一緒に管理できる口

『中国・瀋陽/広州留学体験記』 角野 貴啓

座があり、ATMもよく普及しているので、ほんとに便利である。しかし、日本と同じ感覚でいたため、大変な目に遭った。

瀋陽から広州に出発する直前、瀋陽の口座に親から送金してもらっていたのだが、広州でその通帳で引き出そうとしたら、他の省で作った通帳は使えないと言われた。んなばかなと思ってお偉いさんに食い下がってみたが、どうやってもだめなようだった。夏休み旅行の時間が少なくなるのはどうしてもいやだったので、泣く泣く飛行機で瀋陽へ戻ることになった。しかしトラブルはそれだけでは終わらなかった。

瀋陽に着いて、余裕こきながら銀行へ向かった。自分の中では、お金はもうおろしたも同然だった。しかし窓口に行くと、コンピューターが故障してお金がおろせないと言う。ちょっと焦りながらも、すぐ復旧するだろうと思って待っていたが、1、2時間経っても復旧する気配はない。銀行が閉まる時間も迫る。翌日には時間稼ぎのために飛行機で旅行に出発しようとしていたのだが、翌日は早朝出発でお金をおろす時間はない。すごく焦った。飛行機のチケットを買いなおす覚悟も決め始めたころ、ようやくコンピューターが復旧し、無事お金をおろすことができた。もっとしっかりとしてくれよ、バンクオブチャイナなんだから。

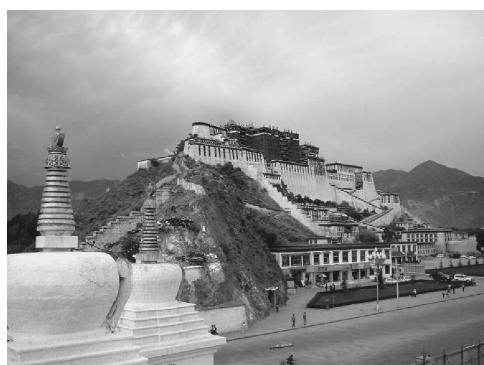
・チベット旅行

瀋陽での学期と広州での学期の間に一ヶ月ちょっとの休みがあったので、かねてよりの念願であったチベット旅行に行くことにした。チベットへの興味の発端は、高校のときに見た映画「セブンイヤーズインチベット」だった。なぜかそれからチベットへ行きたいという想いにとりつかれ、大学に入ったら絶対行こうと思っていた。

そんなわけで、チベット自治区の区都ラサに着いたとき、ボタラ宮殿（チベットの写真といえばこれ！）が見えてきたときはものすごく感動した。ちょうど丸一日くらいバスに揺られてやってきたのだが、ほんとそのかいがあったと思えた。ラサはけっこう歩いてるだけでも楽しい街だった。特にチベット族の市場あたりは毎日行っても飽きない。行った時期に運良く祭りが開催されたのでそれを見に行ったり、ちょっと遠出して寺や湖を見に行ったりした。しかし、僕のチベット旅行のメインはやはり西チベットだった。

チベット自治区は、外国人に開放されていない場所が多く、西チベットに合法的に行きたいのなら旅行会社で車をチャーターするしかない。僕も数人でシェアして行くことになった。目指していたのは、チベット仏教ほかいくつかの宗教の聖地であるカイラス山だ。ラサからは車でも4日前後かかる遠さだが、チベット人にとって一生に一度は訪れたい聖地であるらしい。チベット仏教では神聖なもの周りを巡るコルラという習慣があり、カイラス山もその対象となる。一周

52キロ。普通の旅行者はだいたい2泊3日で一周するが、チベット人は一日で周ってしまう。五体投地（立った状態から仰向けにひれ伏し、また立ち上がるというチベット仏教の祈り方）でコルラする人もいて凄まじい。宗教とは縁遠い生活を送っている自分にとって、こうした光景は圧倒的だった。一生のうち数日ではあったが、彼らの聖地にお邪魔して同じように山の周りを周ったことは、忘れられない貴重な経験になっていくだろう。



・漢民族とチベット族

ある時、ラサの通りを歩いていて間違ってチベット族らしきおじさんの靴を踏んでしまった。「気をつけろ！」と怒られて、そのときはなんでこんな怒るのかわからなかつたが、僕はたぶん漢民族に間違えられていた（下記参照）んだろうと思う。また、西チベットへ行く準備のために市場へ出かけたときにチベット族の露店でフリースを買ったが、そこのおじさんは僕が実は日本人だと知ると、漢民族はがめついから嫌いだとか言っていた。

一般に、チベット族は漢民族のことが嫌いなようだ。理由は、中国政府の支配力維持のためか、中国政府が彼らの文化を抑圧しているからだろう。チベット自治区ではその最高指導者であるはずのダライラマの写真を飾ることさえ許されていない。今後は、まもなく開通されるはずの中国青海省からラサへと続く鉄道の影響で、漢民族の流入が加速していくだろう。実際、現在でもすでに、寺があることやチベット族が密集している地域を除けば、ラサの風景は中国の地方都市と大差ない。彼らがどんどん隅に追いやられていくのが心配だ。

・華南師範大学でのクラスメート

華南師範大学では、瀋陽師範大学に比べて人口構成が面白かった。東南アジアの、それも華人が多い。一番多いのがインドネシア、タイ、ベトナムなどの東南アジアの国、次が日本や韓国やロシアなど、少数派ではフランスやカザフスタンやトルコ、他にはスーダンなどの中東の國の人もいた。クラスの様子を伝えるために、印象的なクラスメートを簡単に紹介しようと思う。

張老師：20代後半の若いクラス担任だった。いつもスポーティーな服装だが、体格はあまり良くない。話の途中に親指を立てるのが特徴。先生の中でも評判は一番。

ペニー：仲が良かったインドネシア華人。男21歳。祖父が中国広東省出身で、インドネシア現地人の血は混じっていない。中国語名も持つが、母語はインドネシア語。

シンディ：同じくインドネシア華人。女25歳。アメリカ留学経験があり、英語も流暢。仕事が見つからなくて中国語も勉強に中国に来たそうだ。日本にもこんな顔がいそうだ。

キャリン：フランス華人。女20歳。祖父母は中国広東省出身だが、両親はラオス出身で、フランス人として育った（らしい）。フランス語が母語で、ラオス語は喋れない。

ジュニ：インドネシア華人。なんか幼いなと思っていたら、14歳だった（！）。兄弟と一緒に中国に来て中国語を勉強しているらしい。

ルアンウェンハー：ベトナム人。男22歳。努力家で、学級長を務める。休みになると長距離バスに乗って故郷のハノイへ帰っているようだ。

チャオシユエ：ベトナム人。男20歳。学期が始まつてまもなく授業をさぼりがちになつた。

誕生日パーティーで飲まされて吐き、色黒の顔が蒼白になつた。

金成煥：韓国人。男24歳。朝鮮系の顔立ちで、ガタイがいい。プライドが高く、名前についてからかうとけっこう怒る。女好きだが真面目な一面もある。



↑華南師範大学のキャンパス

デニス：ウクライナ人。男20代後半。彼の中国名もけつこう適當で（p44参照）、発音すると「ダアニイナー」と少々情けない響きになる。鼻が高くていい顔してるんだけど。

・広東省の方言

広東省は中国の中でも特に方言の種類が多い省だと思う。有名なものだけでも広東語、潮州語、客家語などがある。広州ではよく広東語が話されており、もともと興味もあったので、広東語を喋れる普通の学生を家庭教師として雇って広東語の勉強もしていた。

方言を勉強するというと変な感じがするかもしれないが、標準語と広東語は聞くと全然違う言語のようである。漢字を読むことや文の組み立て方はかなり同じなので、書いてみるとだいぶ似ているのだが、発音がだいぶ違うのだ。反面、広東語には、「つ」の詰まる音や母音の長短の区別があるなど、日本語との共通点がある。

中国人の知り合いにけつこう豪華な食事に招いてもらう機会があり、その部屋にカラオケがあったので、集まった人でカラオケが始まった。日本語の歌は古めの歌がかろうじてある程度だったので、僕はいとしのエリーを熱唱するのが精一杯だったが、招いてくれた知り合いはワンコーラス毎に標準語、広東語、潮州語で歌ってみせてくれた。こんな風に、広州で会った人には標準語といくつかの方言を操る人が珍しくなかった。逆に北方から来た人は、覚えたいとも思わないからということで広東語を喋れない人も多かったけど。

・网吧（ワンバー）

これはネットカフェのことだ。これは中国では大きな都市から小さな都市までよく見られる。さすがにチベットの西の果てにもあったのには驚いたが。僕はパソコンを持って行かなかつたのでもよく利用していた。

僕は主にネットをしたりメールするのに使っていたのだが、中国人がよく使っているのはチャット、ネットゲーム、映画である。中国にはQQという無料でチャットができるソフトがあり、多くの人が使っている。初対面の人同士は、携帯電話番号と一緒にQQ番号を交換したりする。余談だが、授業をしてくれた先生の中には、チャットで出会った人と結婚した人もいたくらいだ。また、僕は詳しくないがネットゲームもかなり盛んで、おそろいのジャージを着た高校生っぽいやつらが集団でやってきて、熱狂して大声を上げながらゲームに興じていたりする。近くに座られるとかなりうざい。また違法コピーが横行している中国では、ネット上で無料で映画や音楽をダウンロードできるらしく、そうした映画を見たりしている人もいる。映画を見たりゲームをしながらチャットをしてる人もいて、器用なもんだ。

・走る露天商、高速撤収のCD屋

中国では、デパートの前や繁華街、バス停付近や歩道橋など、人が集まるようなところではよく露天商がいろいろなものを売っている。文房具とか、海賊版DVDとか、果物とか、小動物とか、もう種類を挙げればキリがない。自分は試したことないが、青空散髪なんかもあるらしい。ほんとにたくさんないのでこういうものなんだと納得していたのだが、ある日肩に商品の載ったかごを下げた人が数人、猛ダッシュで走っていくのを見た。やっぱり一応取り締まる法律みたいのはあるんだろうな。

↓広東省広州の街並み



また、大学近くのデパートの一角にあるCD屋にもよく行っていた。個人営業でCDを売っている人たちが集まっているような場所で、おののの前の棚やダンボールにCDを陳列している。外国から仕入れてきたものが主となるようで、掘り出し物が多かった。特に、日本からのもので、たぶんほんとは売っちゃいけない非売品(各メディアへのプロモーション用CDなど)。「～会社～様、期待の新人です、よろしくお願ひします。」なんて書いた紙が貼ってあるもの)などもあった。ある日、そこのCD売り達が妙に騒がしいので、変に思ひながらCDを漁っていると、誰かが声を上げた瞬間に彼らは猛烈な勢いでCDを回収して撤収していった。そのころはアメリカが中国の著作権侵害にうるさくなっていた頃だったと思う。しかし、実際に中国で生活してみての感想だが、違法コピーの根絶は不可能だと思う。中国行けばわかります。

・自分の顔って・・・

日本にいた頃は自分の顔が何人っぽいなんて考えたことなかったが、中国にいるときはやたらと中国人っぽいと言われた。日本人と一緒にいれば比べられておまえの方が中国人っぽいと言われるし、自分は日本人だと言っても家族や親戚に中国人がいるだろうとまで言われる始末だった。チベットでは、いかにも名前がチャールズっぽいイギリス人(いや、もしかしたらイギリス人じゃないかも)に、お前はネパール人か、インド人か、というようなことまで聞かれた。僕はよっぽど日本人には見えないらしい。

しかし逆に言えば、中国人と日本人の顔はかなり似ているので、生活していても自分は外国人だとはばれないことになる。実際、大学の中を歩いているとよく道を聞かれた。また、中国語は話し方や言葉の調子も場所によってだいぶ違うようなので、語学が上達してからは会話をしてもなかなか自分が外国人だとばれなかつたりした。中国ではそんな楽しみもあった。

・酒

中国にいたときはビールをよく飲んでいた。串焼き屋で、火鍋屋(火鍋は辛いしゃぶしゃぶのような鍋)で、留学生寮で、時には学生食堂で、ちょっと高めの居酒屋で、青空食堂で飲んでいた。中国には各地に独自のビールがある。しかし、自分が味オンチなせいかもしれないが、どれもたいして変わらないように思える。ただ共通しているのは、日本のビールに比べて味が薄いことだ。また、ネットで中国産のビールに発がん性物質が含まれているなんてニュースを発見したが、それでもめげずに飲んでいた。安いのは一瓶50円くらいで値段も財布にやさしい。

また、他に印象深いのは白酒(バイチウ)だ。強烈な匂いと、激烈なアルコール度数(だいたい40から60くらい)で有名で、多くの人たちを苦しめてきたと思う。宴会にはつきものの酒らしいが、中国人は一気飲みが好きなので大変である。

・反日映画

中国のテレビでは、たまに反日映画が放送されている。日の丸のはちまきを巻いた軍人がよく登場するので一目でそれとわかるし、正直不愉快なので、長く見ていることはなかった。なので内容もよく知らない。ただ、中国人は良い人、日本人は悪い人、というふうに描かれていることは容易に想像できた。

広州でのある日、仲の良かったインドネシア人の友達と昼ごはんを食べ、大学内の喫茶店で飲み物を飲んでいた。その女性店員は、僕らの話す中国語を聞いていて外国人だとわかったのか、韓国人かと聞いてきた。僕らは中国人だよ、なんて言って二人でからかっていたが、店を出るときに事実を教えてあげた。僕が自分は日本人だと言うと彼女はけっこう驚いていたようで、「ほんとに日本人なの?テレビで見る日本人はもっと恐いのに。」と言っていた。聞いた瞬間は日本人が

『中国・瀋陽/広州留学体験記』 角野 貴啓

恐いということが理解できなかったが、後からそれは反日映画のせいだと気が付いた。

こういう映画以外にも、新聞では小泉首相の靖国神社参拝など反目的な記事も多い。また、2005年の9月初めごろは抗日戦争60周年記念の時期だったらしく、「抗日」と大きく書かれた新聞があちこちで売られていた。やっぱりこういうものを日常的に目にしてるとなかなか日本に對して友好的な感情を持つのは難しいよなあ・・・。

・人種のるつぼ、香港

広州と近いので、香港にも行ってみた。広州から2、3時間あれば香港の中心の方まで行ける。香港島の通りを歩くと、アジア系はもちろん、欧米系、黒人、アラブ系、イスラム系、東南アジア系などいろいろな人種とすれ違った。どういう事情か知らないが天井付き歩道橋なんかに敷物敷いてたむろしている東南アジア系の人たち、安宿の近くの店で、眼が合った瞬間に「ニセモノトケイニセモノトケイニセモノトケイ」と連呼してくるアラブ系の顔立ちの男、よそ見して歩いて壁にぶつかった僕を見て爆笑していた西洋人、ほんといろんな人がいた。中でも面白かったのは、深夜のコンビニ（香港にはセブンイレブンが普通にあります。広州にもあります）だ。深夜のコンビニに入っているいろいろ見ていると、商品棚に全然関係ないビールの空き缶などが置いてあるのに気付いた。？と思ってあたりを見回すと、黒人やアラブ系の顔立ちの人たちがいくつかグループになって、店内でビールを飲みながら楽しそうに話している。事が飲み込めた。どうやらここは、彼らの憩いの場になっているらしい。ちょっと住んでみたくなった香港。いろんな人間に会えそうだ。

・終わりに

帰国してもう3ヶ月が過ぎようとしている。帰国後すぐに就職活動を開始したこともあり、留学時代のことはどんどん忘れていいている実感がある。夢を見ていたような感覚だ。旅行中には日記も頑張っていたのだが、それでも1週間くらい書き溜めたりするような人間なので、留学生活に関して文章の記録あまりは残っていない。写真は割りと撮ったのだが、所詮は切り取られた一瞬なので、全て覚えていられるわけではない。でも、匂い、例えばほっこりの匂いを嗅いだときなんかに、向こうでの生活や情景をぶわーっと思い出すことがある。そんな風でもいいから記憶は残っていてほしい。帰国してからでも会いに行きた友達もできた。いずれ会いに行きたいな。



↑日本語学科の学生たちと

■□■留学アンケート■□■

①その国に持って行って良かったものは何ですか？

必要最低限のものしか持って行かなかった。ただ、小さくて内容豊富な電子辞書はやはり必須だと思う。分厚い辞書のみでは機動力に欠ける。

②その国に持って行かなくて後悔したものは何ですか？

パソコン。長期で行くなら、多少面倒でもあったほうが良いと思う。ネットを使うためにわざわざネットカフェに行っていたので、ちょっと気になった情報などすぐに調べられず不便だった。

③服装はどうしてましたか？現地で服を買いましたか？

最初から現地調達するつもりで行ったので、季節にあわせ買い足した。ちょっとみすぼらしかつたが、ぱっと見完全に中国人だったので、安全面など、多少メリットはあったかも？

④インターネット、音楽、書籍、テレビなど情報環境はどうでしたか？

瀋陽、広州のどちらでも、留学生寮の部屋にネット環境、テレビがあり、ネットカフェもたくさんある。またどちらも大都市なので街に出れば大きな書店があった。音楽は、安い値段で中華ポップスから洋楽まで手に入る（正規版はまず見つからない）。

⑤留学生の国籍構成はどうなっていましたか？

瀋陽では、韓国人が 90%、ロシア人が 5%、日本人が 5%、あとは稀にアメリカ人やイギリス人などがいた。広州では、インドネシア 25%、タイ 25%、ベトナム 25%、日本 5%、韓国 5%、ロシア 5%、あとは欧米、中東諸国など。